

平成 22 年度研究チーム活動中間報告（第 1 回目）

「平生鈇三郎におけるイギリス的伝統」

No. 117 研究幹事：中島俊郎（文学部）

『平生鈇三郎日記』第一巻、第二巻を刊行し、目下、第三巻の刊行に向けて鋭意努力しているが、この間、解題に近い第一巻から第三巻の、時代的に言えば大正二（1913）年十月七日から大正九年五月三十一日までの平生日記の「後記」の執筆と『平生鈇三郎日記』にみる大正期一実業家の時代精神（『法学研究』第八十四巻第二号）を著した。大正前期における平生研究であるが、時代は国内的には護憲運動が盛んになり、所謂大正デモクラシー華やかかなりし時期であり、国際的には第一次世界大戦の勃発と終焉の時である。また高等学校改正令に伴い、甲南高等学校を視野に入れての甲南中学の創設、さらには甲南大学を構想している時期でもある。ある意味で平生が最も輝いていた時期である。思想的に見るならば、デモクラシーを巡っての思想を練る時期である。日蓮の思想にそれを読み込むことも躊躇していないし、ウイルソンやラッセルのデモクラシー論に同意したりもしている。さらに制限選挙論から普通選挙論に変わる時期でもある。真の税負担者は地主よりも小作、資本家よりも労働者だからとの認識を持つに至ったからである。また平生は武門に生まれたことに誇りを持っているので、実業家でありながら政治への関心が強く、その意味では非政治的領域から発信する政治的発言はデモクラシーの一つの有様を示し、平生が関西実業家の経済中心主義を批判し、実業家のみならず一般市民の政治思想の涵養の必要性を説くことによって、ドイツ流ではなく英国流立憲主義の実現を説く時期でもある。平生の立脚点は人類共存主義であるので、デモクラシーもこれに符号すると信念をもち、第一次世界大戦後のヴェルサイユ講和条約を巡っては中国問題よりも人種差別撤廃問題を重視し、それが世界平和に通じるとし、さらにドイツに対する苛酷な損害賠償は必ずドイツが再度戦争に駆り立てることを予言している。日本は連合国側であったが懸念材料として軍国主義の国と思われていることであると指摘し、軍人の政治外交上に占める位置を批判するのであった。教育論では人物養成を教育観の基本に置き、ルソーの『エミール』やスマイルズの『品行論』、それに人物養成を主眼としているとみた英国の学校教育に興味を抱いている時期である。中学校から帝国大学にいたるまで職業教育に偏している日本の教育を批判して寛厚にして気品高尚な、他の模範となる人物養成教育を平生は幼稚園から大学に至るまで行おうと構想していたのである。この一年では引き続き、平生の思想の真髓と平生の行動とが何れから来、何れに行こうとしているのかをさらに追究していきたい。

さらに実証研究についても付言しておこう。平生鈇三郎の蔵書は大部分が甲南大学図書館に寄贈された。寄贈された本から人間関係もうかがえるのだが、それ以上に、これまでの調査では蔵書書き込みの検討、読書傾向については満足に追究されていない。先生におけるイギリス的伝統に考察を加えるに当たり、先生自ら注釈を書きこんだ、読後感を記した手沢本はきわめて意味深いものがある。とりわけ重要だと思えるのは『ジョン・ラスキン全集』である。ラスキンの独特な人文主義的色彩の強い社会観、経済観と、平生イズムには共通な脈絡がある。この共振、共鳴関係はじつに興味深いものがあり、深く検討してみる価値があると信じる。